

全ては患者のために

—日本放射線看護学会学術大会 印象記—

二ツ川 章二
Futatsukawa Shoji

平成 27 年 9 月 12, 13 日, 指宿ベイテラス Hotel & SPA (鹿児島県指宿市) で, 第 4 回日本放射線看護学会学術大会が開催された。日本放射線看護学会は, 東京電力(株)福島第一原子力発電所事故(東電原発事故)を経験し, 放射線の医学利用が増大する中で, 放射線看護の発展を図り, 専門的活動の質の向上に寄与することを目的として平成 24 年 5 月に設立された。

今大会は, 「最先端の放射線診療の現場から放射線看護の未来を拓く」をメインテーマとし, メディアポリス国際陽子線治療センターの見学会も実施された。第一会場では, 会長講演(写真 1), 「医療安全」と「放射線看護教育」のシンポジウム, 「治療看護」と「IVR 看護」の看護交流会, 淡河恵津世久留米大学医学部附属病院放射線科教授による「乳がん放射線治療の将来展望」の特別講演が開催された。また, 細野真近畿大学高度先端総合医療センター教授による「最新の国内実態調査に基づく診断参考レベル(日本版 DRL)の設定」のランチョンセミナーが開催された。セミナー後には平成 27 年度日本放射線看護学会総会が開催された。第二会場では, 口頭発表が行われた。「放射線治療看護」に関する演題が 10 題, 「放射線防護と被ばく看護: 地域」6 題, 「放射線防護と被ばく看護: 臨床」5 題, 「緊急被ばく医療」4 題, 「IVR/検査看護」5 題の発表があった。ポスター会場では, セッションごとに分かれてポスター発表が行われた。「放射線治療看護(1)」6 件, 「放射線看護全般」6 件, 「放射線防護と被ばく看護: 地域・教育」7 件, 「放射線治療看護(2)」5 件, 「放射線治療看護(3)」6 件のポスター発表があった。また, 当協会も賛助会



写真 1 中馬育子大会会長の会長講演

員として, 協会の活動を紹介する展示ブース(写真 2)を設置した。2つのシンポジウムを中心に, 学術大会の様子を報告する。

今大会は, メディアポリス国際陽子線治療センター 中馬育子大会会長の「放射線ポジティブシンキング」と題する会長講演から開始された。21年の看護歴, 5年の陽子線治療の看護歴を基に, “治療看護に学術的視点はなぜ必要なのか?”を問い, 事例研究で終わることなく, 実際の看護で得られる豊富なデータを分析し, エビデンスとしていく必要性を強調した。学術的楽しみ方を得ることが必要であり, また, 看護師自身が放射線を正しく理解しないと患者に安心感を与えることはできないと看護師に対する放射線の基礎教育の重要性を訴えた。

医療安全シンポジウムでは, 「世界の医療安全管理と日本の医療安全管理の良さを知る」をテーマに 2人の講演があった。JCI コンサルタント Terence M. Shea 氏が「放射線治療分野における国際患者安全目標」について講演した。放射線治療及び診断検査区域に適用して患者安



写真2 日本アイソトープ協会展示ブース

全を向上させるための国際患者安全目標として、患者確認、安全なコミュニケーション等、6つの目標を挙げた。これらの目標は個人が全てを確認することは困難であり、チームワークで確認すること、患者を参加させることによりプロセスを理解してもらうことが必要であると強調した。鮎沢純子 九州大学病院院長補佐は「世界の医療安全管理と日本の医療安全管理の良さを知る、そして、活かす、発信する!」と題して講演した。「謙虚に学ぶ」、「本質を学ぶ」、「正しく知る」の良さを世界に発信していくことが必要であると述べた。また、看護師が医療において品質・安全のリーダーであり、そのために、チームメンバーから信頼され、メンバーを尊敬し、リーダーとなるべき覚悟を持つ必要があると強調した。

放射線看護教育シンポジウムでは、「災害・被ばく医療における放射線看護教育～長崎大学・福島県立医科大学の共同専攻が目指すもの～」をテーマに4人の講演があった。長崎大学原爆後障害医療研究所 高村昇教授は「共同専攻の概要、カリキュラムの特徴」と題して講演した。長崎大学では、2010年度に「放射線看護専門看護師養成コース」を設置し、放射線災害緊急被ばく医療や放射線健康リスクコミュニケーションに対応できる看護師・保健師の育成を見据えた教育を開始、その成果が東電原発事故で示された。この分野の専門家の育成のため、全国に先駆けて教育を開始している長崎大

学と東電原発事故を受けて緊急被ばく医療を構築し、その経緯・情報を国際的に発信していく役割を担う福島県立医科大学が共同で設置した共同専攻の概要とその取組みについて紹介した。福島県立医科大学医療総合学習センター 吉田浩二氏は「長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻「放射線看護専門看護師養成コース」修了生の活動の紹介」と題し、修了生として取り組んだ東電原発事故後の急性期から現在までの一連の活動を紹介した。本学会理事長の東京医療保健大学 草間朋子教授は「放射線看護教育への提言～「災害・被ばく医療科学共同専攻」への期待～」と題して講演した。看護師は、常に、住民から信頼される専門職、看護職であらねばならないとし、共同専攻への期待として、「人材育成」「被ばく医療における看護業務の標準化」「放射線看護に関する研究と政策誘導ができるデータの集積」「地域貢献」の4点を挙げた。弘前大学大学院保健学研究科 西沢義子教授は「放射線看護教育への提言～CNS「放射線看護」分野特定に向けた取り組みから期待すること」と題して講演した。平成26年度の「放射線看護」分野特定の申請で「条件付き認定」となり、放射線看護に明るい兆しが見えたことを紹介した。また、看護学の発展のためには医学や保健学、社会学、心理学、教育学、工学等との融合を視野に入れた連携活動が必要不可欠であり、若い学会として社会を動かす力を持つためにもエビデンスの蓄積を強調した。

本学会は、緊急被ばく医療看護と放射線医療看護の2つのテーマを掲げ、約500名の会員がおり、会員数は増加している。医療放射線の安全管理を徹底するためには、医療現場において最も患者の近くにいる看護師の役割は大きい。実践事例研究とともに、150万人いるといわれる看護師に対する放射線知識の普及も喫緊の課題であり、本学会への期待はますます大きなものとなる。当協会としてもできる限りの協力をしたいと考えている。

(日本アイソトープ協会)